

サンディエゴ日本人教会トピックス【2018年2月】

待ちに待った冬のオリンピックも閉幕しました。世界が一つになって平和を願いつつ開幕したピョンヤンでのセレモニーに始まり、選手達がメダルを目指して戦い、陰にあっては、怠ることなく訓練を続けてきた成果が現れ、世界中の人々を感動させ、涙してテレビ観戦したことでした。

日本もですが、アメリカのいたるところでは、未だに厳しい寒さに見舞われ雪と戦っている日々です。ここサンディエゴでは、最近になってやや寒さが戻って来たような日々となりました。しかし、街路樹の木々は、はや新芽が芽生えて美しく、春を待つ喜びが聞こえてくるようです。その後、皆さん、いかがお過ごしですか。神様の豊かな御祝福をお祈りいたします。

今月のトピックスは次のものを掲載いたします。

1. ビリー・グラハム博士を天へ送って！
2. 婦人会での証：石塚絵里子姉
3. ポッド・キャストで礼拝メッセージを…いつでもどこでも聞けます！

1. ビリー・グラハム博士を天へ送って！

主の僕、ビリー・グラハム博士が2月21日99歳の生涯を全うされて天へ凱旋されました。アメリカでは国を挙げてお別れの時を持ちました。また生誕地の Charlotte, North Carolina での葬儀は家族の方々が思い出を語られ、心温まるお別れの時を拝見しました。ビリー・グラハム博士のライブラリーの傍にはテントの集会場があり、その傍には十字架を大きく彫られた礼拝場があって、棺はその中へと運ばれて行きました。

世界中で多くのクリスチャンを生み出された宣教のお働きを終えて、師は今、イエス様の御もとで安らいでおられます。最後にサンディエゴに来られた時の大会で大勢の方々が救われ、今も素晴らしい信仰の成長と継承をいただき、皆さん励んで主にお仕えしておられます。当時の事が思い出され懐かしくよみがえってまいります。

「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。」 II テモテ 4 章 7～8 節

「彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています。」
ヘブル 11 章 4 節 アーメン

2. 婦人会での証：石塚絵里子姉

私は双子の妹と、両親の四人家族で育ちました。東京で生まれて、すぐに千葉に引っ越しました。父の仕事の関係で、家族でインドに赴任し、2回赴任しました。一回目のインド生活は、3歳から小学1年生の終わりまで、カルカッタに4年半住みました。

小学2生から6年生の途中までは、千葉に住みました。その頃の思い出の一つは、毎年お盆とお正月に父の実家に行ったことです。

父は福井の田舎の浄土真宗のお寺の次男で、私の祖父や、叔父さん、親戚にはお坊さんが沢山いました。私の父はその道ではなく、ビジネスマンとしての道を歩んでいました。父の実家に家族、親戚一同が集まり、様々な行事のために、掃除、料理、片付けのお手伝いをしてきました。おじいちゃんやおじさんたちが正装して、仏壇の前に座り、お経をあげている姿は見慣れた光景でした。しかし自分たちの千葉の家に戻ると、私たち家族の日々の生活には、神様は全く関係ないように感じられました。

そして二回目のインド赴任があり、今度は首都のニューデリーに3年半住みました。6年生を卒業するまでの数ヶ月間は、日本人学校に通い、それからはアメリカンスクールに行きました。日本の厳しい受験の雰囲気やプレッシャーを全く知らずに、勉強は大変でしたが、音楽、スポーツ、演劇など様々な活動にも熱中できた充実した中学生時代を送りました。

高校からは両親の強い要望で、京都にある日本の帰国子女受け入れの高校に入りました。両親はまだインドにおり、15歳の私と妹は、親元を離れて寮生活をはじめました。

数年おきの引越しで、常に友達との別れと出会いの繰り返しでしたが、いつも双子の妹と一緒にいたことは、感謝でした。妹とは、何をするにも周りから比べられましたし、またお互いライバル心が強かったのですが、同時にベストフレンドでした。

信仰というものについて真剣に考え出したのは、日本の高校に入ってからでした。インドで生活している時は、ヒンズー教のお祭りやお祝いが良くあり、仏教の聖地ブッダガヤに行ったこともあり、モスク、お寺や遺跡もたくさん見てきました。インターナショナルスクールでは、クリスチャンや、ヒンズー教、イスラム教の人も沢山いましたが、「宗教は、悪いものではないと思いましたが、けれど私は神様なんかいない。信じない。自分の力で生きていける」と自信を思っていました。

入った日本の高校は、同志社国際高校というキリスト教主義の学校でした。キリスト教について知るのには悪くないと思っていましたが、毎朝のチャペルの時間や、聖書の授業からは、あまりキリスト教について良い印象を受けず、正直がっかりしました。

しかし、高校2年生の時の英語の先生がクリスチャンで、興味のある人は、ぜひ近くの教会に行くように熱心に誘ってくださり、「教会ってどんなところなのか行ってみようかな。」ぐらいの軽い気持ちで、早速、妹と行って見ることにしました。教会に行ってみると一番びっくりしたことは、人々の暖かさでした。そして、様々な年代の方が、みんな、生き生きとしておりました。

今までの自分は、外面的には、明るく、楽しく振舞っていました。しかし同時に、高校生になって、段々自分の限界に気づき出しました。自分がどんなに頑張ってもできないことがあることを何度も経験しました。自分が情けなく、虚しく思われても、どうしたらいいかわかず、一人で悩み出すと、寝付けず、眠れない夜が増えて行きました。

しかし、日曜日に教会に行くと、いつも心が軽くなりました。少しずつですが、確実に、クリスチャンの方々の、イエス様への信仰による平安、喜び、そして感謝に溢れた生き方と価値観に惹かれて行きました。

クリスチャンの人には、信仰というのは、日常生活を通して神様と個人的な関係を持って歩むことだと気づかされ、一年に数回のお参りの時に何かをすることではないのだとわかりました。

そして、クリスチャンのみんなが祈っているのをみて、自分も半身信半疑で祈ってみました。すると、祈りは本当に聞かれる！という衝撃的な経験を何度も受けました。神様がいつも居られ、どんなことでも祈れば、自分の思いを超えて良い道へと導いてくださることを知ると、寝る時に感謝と賛美の祈りをするので、平安を得てよく寝れるようになりました。

私がクリスチャンになるまでの最後のハードルは、悔い改めることでした。「自分が罪人」と言うことがなかなか受け入れられませんでした。しかし、聖書のいう罪は、犯罪を犯すことではなく、神様に背いて生きることだと知りました。自分を正直に見直すと、今まで家族や友人を言葉や心の中の思いで、たくさん傷つけてきたことが思い出されました。自分が自己中心で、プライド高い者であると気づきました。

神様を信じるだけでなく、イエス様が自分の罪のために十字架にかかり、死んで蘇ってくださったことが信じられました。そして心からイエスさまを信じ、自分の罪を許してもらいたい、これからはイエス様と共に生きて行きたいと思いました。

高校3年生のクリスマスに、妹と一緒に洗礼を受けました。クリスチャンになっ

て、約半年後に、私はアメリカのイリノイ大学に留学しました。

もう早くもアメリカに来て、20年以上経ちました。20年間の海外生活、そして信仰生活を振り返ると、自分の計画通りにはいかなかったことばかりで、多くのチャレンジもありましたが、神様の恵みはそれに優って数え切れません。特に感謝していることは、両親や兄弟とは地理的に離れていても、主にある家族、コミュニティが与えられてきたことです。イリノイでも、4年間住んだドイツでも、主にある兄弟姉妹、信仰の大先輩の両親や祖父母のような存在の方々との出会いと交わりに、いつも支えられ、励まされてきました。

去年の9月に、私たち夫婦は家族と、サンディエゴに引っ越して来ました。学生時代から15年以上住んだイリノイとは、文化も生活感覚も大きく違い、初めはまるで外国に来たような気がしました。しかし、このサンディエゴ日本人教会に導かれ、良い出会いに恵まれ、主にある兄弟姉妹と共に信仰生活を送れることに、心から感謝しています。

4. ポッド・キャストで礼拝メッセージを… **いつでもどこでも聞けます！**

教会では毎週日曜日の礼拝メッセージをポッド・キャストでお送りしています。ポッド・キャストでの礼拝メッセージは、何処でも、何時でも自由に聞くことができます。ご都合で礼拝に出られない方、州外、地方、外国にお住いの方など、どうぞご利用くださいますようお願いいたします。

<https://www.sdjcc.net/> 日本語サイトをご覧ください。

ラッドとし子